

『命のうた ぼくは路上で生きた十歳の戦争孤児』  
竹内 早希子 || 著 石井 勉 || 絵  
童心社

戦争で親を失った孤児たちは「浮浪児」と呼ばれ、路上で暮らしました。大人に守られず、邪魔な存在だと差別され、飢えや病気で人知れず死んでいった子どもたち…。十歳の時に神戸大空襲で家族を失ったセイちゃんこと、山田清一郎さんもその一人でした。

あの頃の仲間たちの、声なき声を伝えたい。長い間語れなかった思いを、感じてほしいノンフィクションです。

図書館おすすめブックリスト

2023年8月発行

編集・発行 砺波市立図書館



ココロふるえる本との出会いで ハートフル充電!!

No.22 小学4~6年生向け

『パフィン島の灯台守』

マイケル・モーパゴ || 作 ベンジー・デイヴィス || 絵  
佐藤 見果夢 || やく  
評論社



嵐の夜、リバプールへ向かう船が座礁します。小さなボートで乗客たちを助けたのは、不愛想な灯台守の老人でした。そのとき5歳だったアランは、灯台守のベンにもらった絵を心の拠り所にし、やがて灯台守に会いに行きます。ベンは、傷ついた一羽のパフィンを介抱していました。

人にはそれぞれ、選ぶべき道があります。アランや灯台守の生き方が、静かに胸に迫ってきます。

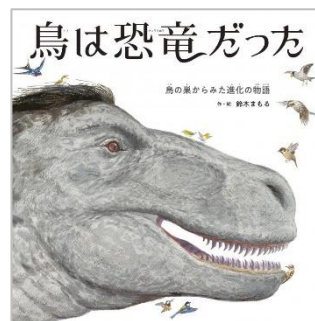


『絵で旅する国境』

グドル || 文 ヘラン || 絵 なかやま よしゆき || 訳  
文研出版

世界には、自由に行き来できる国境、頑丈な門がある国境、新しくできた国境など、様々な国境があります。共通しているのは、となりの国の人々と出会う場所だということ。その出会いが私たちの暮らしを豊かに変えてきました。

美しいイラストを楽しみながら、あなたの知らない国境を探しにいきましょう。世界の見方が大きく変わります！



『鳥は恐竜だった 鳥の巣からみた進化の物語』

鈴木 まもる || 作・絵  
アリス館

鳥の巣の形に興味を持った鈴木さん。調べていくうちに、恐竜から鳥への進化の不思議について考えるようになります。

同じように卵を産み、巣を作る生き物なのに、なぜ恐竜は滅び、鳥は生き残っているのか。その鍵は地球環境の変化に適応して多様に進化してきた鳥の巣の形にあるのではないかという筆者の考えを、豊富なイラストと易しい文で解説しています。



『保護ねこ活動ねこかつ！  
ずっとのおうちが救えるいのち』  
高橋 うらら || 著  
岩崎書店

保護ねこカフェ「ねこかつ」を運営する梅田達也さんの活動を、保護ねこ「ルンバ」の視点で描くノンフィクションです。猫の殺処分<sup>せつぶん</sup>に心を痛め、懸命に取り組む梅田さん。被災地での保護活動や、ペットショップのあり方への問題提起など、一匹でも多くの命を救おうとする姿に心を揺さぶられます。人とペットの幸せなあり方を、この本で考えてみませんか？



『ココチン 草原の姫、海原をゆく』  
佐和 みずえ || 作 トミイ マサコ || 絵  
静山社

元の皇帝フビライ・ハンの末娘ココチンは、元気な17歳。イル・ハン国に嫁ぐよう命じられて、使者パルスやマルコ・ポーロらとともに、砂漠の国へ1年以上かかる旅に出ます。嵐にあたり、海賊と戦ったり、いろんな困難を周囲の人とのりこえていく中で、ココチンとパルスが絆を深めていくところも見どころです。

『コレラを防いだ男 関寛斎』

柳原 三佳 || 著  
講談社

今から150年以上前、幕末の江戸に、おそろしい早さで広がる流行り病・コレラが発生。そのパンデミックに敢然と立ち向かった「関寛斎<sup>せきかんさい</sup>」という医師がいました。

「ウイルス」という存在が知られていなかった時代に、どうやって感染拡大を防ぎ、人々の命を守りぬいたのでしょうか。歴史を学びながら関寛斎の生き様に触れることができます。



『雨の日は好きな人』

佐藤 まどか || 著  
講談社

小学6年生の七海に、母の再婚で2才上の姉ができた。新しい家族と暮らすことを楽しみにしていたのに、姉の幸は病弱で入院中。両親とも幸にかかりきりで、さみしい毎日を送る七海は、親友と喧嘩したり母に叱られたりした反動で、両親に禁じられていた姉と面会することを思い立つ。



『ブラックホールってなんだろう？』  
嶺重 慎 || 文 倉部 今日子 || 絵  
福音館書店

あらゆる物質、光さえも吸い込むといわれる、謎につつまれた天体ブラックホール。どのように生まれ、どのように吸い込むのかを、わかりやすいイラストで教えてください。けれど、ブラックホールにはまだまだ謎がたくさん。もしかしたら、星の誕生にも関わる重要な役割があるのかも…。その正体を解き明かすのは、あなたかもしれませんよ。



『だれもみえない教室で』  
工藤 純子 || 著  
講談社

元は仲良しグループの連、清也、颯斗。ある出来事をきっかけに、颯斗が清也に嫌がらせをするようになる。ついに先生や親にも知られ、問題は複雑になっていく。複数の視点から、それぞれの抱える思いが描かれており、いじめが単純な問題でないことに気づかされる。